

インドにおける「食べない」文化と平和創造力

佐藤 幸治

はじめに

筆者は、一九九九年から二〇〇三年まで約四年にわたって国際交流基金の駐在員としてインド共和国の首都、ニューデリーで生活した。本稿では、その生活体験から私が観察したインドの食と文化について紹介し、簡単な考察を加えてみたい。

インドの食と聞いて、まず外国人の頭に浮かぶのは「カレー」であろう。肉や野菜などの食材を数種類のスパイスで調理した料理は、なるほど我々が日頃親しんでいるカレーライスに似ているものもあるが、液状ではなくドライな形状のものもあり、また、色あいも赤、黄色、緑など実にバラエティーに富んでいる。これは食材によって調理法、使用するスパイスが異

なるためであり、異邦人がこの国の豊かな食文化を一把からげてカレー文化と呼ぶのは、いささか乱暴にすぎるのである。

それは言ってみれば、日本人の食文化をして「彼等は醤油を食べている」と評するようなものである。デリーは一〇度を下回る冬の季節も数カ月あるが、一般的にいつて非常に暑い。冷蔵庫の普及度は高くなっていても、停電が頻発するために食材の保存は非常に難しい。よって、酷暑期には我々外国人であっても肉食を控えがちになる。そのかわり、この地では味のしつかりした豊富な野菜がとれ、それを何種類ものスパイスでおいしく調理することから、野菜だけの料理でも淡泊ということは全くない。そんな風土の故だろうか、インド亜大陸においては食文化が人々の日常生活レベルで発達している。本稿ではインドにおける「食べない」文化、すなわち菜食や断食といった食

に対する様々な自己規制と、その歴史的・宗教的背景を中心に論じてみたい。

ヒンドゥーと断食・菜食

ニューデリーでの生活の日課として、毎朝七時から九時まで、私は家庭教師によるヒンディー語のレッスンを受けていた。グルジー（先生）は、五時に起床し入浴（湯舟にはつからず水で身体を流すのがインド式）とお祈りを済ませ、六時半には家を出て、約三十分かけて毎日我が家に来てくれた。筆者にとつてはグルジーが目覚まし時計であり、インドでの毎日がグルジーとの対面からゆるやかに始まるのだった。インドは地域差はあるが、一般的に非常に暑い国だ。四月から六月までの酷暑期には、ニューデリーでは日中の最高気温が四〇度をはるかに超え、時に市販の温度計の目盛りの限界、五〇度に限りなく近づく。外を歩いていて、なぜか汗で皮膚が湿ることがないの
で安心してしていると、実は汗は出るその都度気化してしまっていることに気付く。そんな土地においては、水が命の源となる。商店街、住宅街など人通りの多い場所の一角に、マトカと呼ばれる素焼きの壺に入れた冷えた飲料水がおかれていて、通りかかる人々が乾きを癒している。家に来客があると、なにをさておき主人が用意しなければならぬのが、コップ一杯の水だ。

眠い目をこすりながら、グルジーにコップ一杯の水を差し出す。まだ七時だというのに外はすでに三〇度を超え、グルジーは汗をぬぐいながらおいしそうにそれを飲み干した。もう一杯雑談をしていると、数分遅れてお手伝いさんがやってきた。通いのお手伝いさんとして私が雇っていた彼も、毎朝三〇分ほどかけて我が家にやってきて、まずはグルジーと私のために、ミルクと砂糖をたっぷり入れて煮出したチャイイ（ミルクテイイ）を作ってくれる。インド人はとにかくチャイイを良く飲む。一日に五杯は確実に飲んでいいるはずだ。二人は、あつあつのチャイイに口をつける。「一口、三口。「あー」とグルジーが叫んだ。「うっかりしていた。今日は断食の日だった。あー、朝から断食の掟が破れてしまった……。」

高位カーストの敬虔なヒンドゥー教徒であるグルジーは、厳格な菜食主義者であり、かつ自宅の祭壇に祀るサントーシュ・マターという女神の信仰にとつて重要な日である木曜日は断食をする日と決まっており、朝起きてから夕食の時間まで、水以外の一切の飲食をすることはならないことになっている。「ブラット・トゥートガヤー！（断食が破れてしまった）」と顔をおおって落胆するグルジーの姿に、私はヒンドゥー教徒の信仰の篤さに気付くとともに、その信仰心がいかに自己犠牲、ストイシズムに立脚しているかに驚きの念を禁じ得なかった。

インドの人口を宗教別に見ると、圧倒的マジョリティーを占めるのがヒンドゥー教で、これが約八〇%を構成する。次に多

いのがイスラム教徒で約一三%。このほか、シーク教徒が三%、ジャイナ教徒、仏教徒、キリスト教徒、ゾロアスター教徒などがそれぞれ一〜二%程度を構成している。このうち、ヒンドゥー教徒、ジャイナ教徒、仏教徒のなかには、菜食の文化、敢えて肉食をしないという思想が深く根付いている。加えて、ヒンドゥー教の人々は特定の宗教的祝日、特定の曜日に断食をする。先に触れたとおり、筆者のグルジーの場合は木曜日が断食日にあたる。叙事詩ラーマヤナにおいてラーマ神に使える猿の王ハヌマーンを祀る火曜日も、多くのヒンドゥー教徒にとって断食日であり、あるいは肉食が全般的に忌避される。この日は、多くのレストランが閉店となり、仮に開いていても肉類は一切出さない。火曜日の深夜、ニューデリーの繁華街コンノート・プレースで野菜だけの食事を済ませて家路につくとき、すぐ近くにあるハヌマーン寺院に数百人の信者が行列をなして参拝している姿にしばしば接したが、宗教が世俗空間のなかに堂々とはみだしているインドの実像に触れられる非常に印象深い場所である。

また、特定の宗教的祝日に関して、広大な地理的拡がりのなかでは地域間の多様性も非常に大きい。そんななかでほぼ全国にわたって共有されているのが、Dashara(ダシャラー)と呼ばれる、例年十月下旬に行われる祝祭である。DasharaのDasとは数字の十を意味し、Dasharaとは十日続く祝祭の最終日にあたる。ラーマヤナにおいてラーマがランカ島の悪神ラーヴァ

ナを倒し妃のシータを救出したクライマックスがこの時期にあたる。この言い伝えに基づき、人々はその苦しい戦いを追体験するかのようになり、Dasharaに至るNavratriと呼ぶ九日間(Navは数字の九の意)、断食を行う。そして勝利の十日目には、街中の広場にランカの悪神たちの巨大なはりぼてが設置され、二時間を超えるラームリラ(ラーマヤナ劇)上演の後、ラーマ神を演じる俳優が火のついた矢をはりぼての悪神むけて放つ。火ははりぼてにしかけられた数千発の爆竹に引火し、メラメラと燃え落ちるはりぼての姿に人々は歓喜するのだ。

また、夜遅くまで業務が続いた日のこと、事務所の運転手さんたちがいつになくそわそわしているので事情を聞くと、その日は妻が夫の健康と安全を祈って一日断食をするカルワート・チョートという日であり、自分が帰宅するまで妻は水一滴さえ口にできないと言っではないか。さすがにこの日は、彼等の奥様達に大変申し訳なく思ったものだ。

かように、菜食や断食は、インドのヒンドゥー教徒の生活に深く根ざしており、しかも世代を超えて若者たちも励行していることから、今後も絶えることなく続いていくものと思われる。筆者の二十代、三十代の友人・知人のなかにも厳格な菜食主義者が多く、日本とさして変わらない若者文化が浸透しパーティーの飲酒、喫煙、ダンスなどが当たり前になっていくなかあっても、一切肉を口にしない人々が多い。

アヒンサー（不殺生）の思想

次に、こうしたヒンドゥー教にみられる様々な食餌制限の根拠となっている教義的基盤について見てみよう。インドにおける肉食主義、ヴェジタリアニズムを支えるエートスは、アヒンサー（不殺生）の思想である。といっても、アヒンサーの思想はヒンドゥー教に元来固有のものではなく、原始ヒンドゥー教ともいべきバラモン教の聖典ヴェーダには、こうした不殺生にかかる制限は一切書かれていない。むしろ、不殺生はこの後に発生した仏教やジャイナ教にこそ特有の思想であり、現在において、肉食に関する徹底ぶりはジャイナ教がヒンドゥー教をしのいでいる。彼等の多くが、卵はもちろん動物の乳は一切摂取しないばかりか、野菜においても土を掘り返して殺生を侵す危険性を回避するため、球根・根菜をすら口にしない。法衣を来て杖をつきながらデリーの街を闊歩するジャイナ教の僧侶に時として出くわすことがあるが、彼等は一様にマスクをしている。過って空中を飛ぶ虫を口に入れてしまわないための配慮であるという。

ヒンドゥー教はこうした後発宗教の不殺生思想を取り入れながら発展していった。ヒンドゥーの教派のなかでも徹底したアヒンサー思想を遵守するヴェーダンタ学派は、ウパニシャッド哲学の教理の中心をなす「梵我一如」を理想状態とする。「我

(=Atma)」とは個々の人間の想念と肉体を指し、「梵(=Pran-
atma、pranは「最高の」の意)」とは、宇宙的最高我すなわち神である。本来、AtmaとPran-atmaは同じ構成要素から成るが、人間は一枚の皮袋を隔てて世界と接しており、両者の間の長期にわたる物質や気の交通の結果として、皮袋の中身には淀んだ気や不純物が堆積しがちである。そうした不純物が人間の世界認識を曇らせ、最高原理としてのPran-atmaの正確な認識(=解脱)を困難にしている。そうした曇らされた人間の
世界認識をMaya(幻)と呼ぶ。こうして、ヒンドゥーはもともと人体を不浄とみなす傾向があり、これを浄化させるための手段として、肉食、断食、あるいはヨーガといった方法がとられる。

しかしながら、普通に社会生活を営む人々にとって、ウパニシャッド哲学が説くAtmaの浄化によるPran-atmaとの一体化による解脱というものは、非常に困難な修行を要するものであり、非現実的であると思われた。そこで、一般民衆にとつても永遠の輪廻転生から解放され解脱(moksha)を得られる方法として発展したのが、いわゆるバクティ(信愛)思想である。哲学的な難解さは求めず、ただひたすらに神に帰依すること。これがバクティの基本思想である。叙事詩マハーバーラタの一要素となっているヒンドゥー教の最重要聖典、バガヴァット・ギーター(紀元一世紀成立)において、敵方の親族を殺めることを恐れたアルジュナに対し、御者に扮して参戦するヴィシュ

又神の化身、クリシュナが戦士としての義務の遂行を論ずるとき、自らの行為義務をまつとつすることのみに集中し、結果は神に委ねよと説いた。これがバクティ思想のはじまりとされる。ヒンドゥー教の創始時には神と人間の関係性は非常に観念的であったが、バクティ思想の誕生後、ヒンドゥー教そのものが土着的の神話・伝承を吸収しながら巨大な神話体系として発展していった。シヴァ、ヴィシュヌなどの具体的人格をもった神々が殿堂に居並ぶことにより、庶民は観念ではない非常に近い存在として神を意識し、自身と自然、外界との運命的紐帯を感じることができるようになった。特に、ヴィシュヌ神に顕著な化身(Avatar)という作用が、その後に庶民に愛され続ける数多くの神話物語を形成する結果を招来することとなった。魚、亀、野猪、人獅子、小人、パラシユラーマ、ラーマ、クリシュナ、ブツダ、カルキ(最後のカルキはまだ出現していないとされる)というのが、インド人であれば誰でも知っているヴィシュヌの十化身である。特に様々な英雄伝説とともに現在も身分、世代や性別を越えて大衆的に愛されているのが、七番目の化身ラーマと八番目のクリシュナだ。彼等の物語は、吟遊詩人により詠われ、バラタナティアムやカタック、オリッシーなどの古典舞踊の主題となり、テレビドラマとしてお茶の間を賑わしている。インドを旅してバザールを歩いたことのある人なら一度は目にすることがあると思うが、インド映画のヒーロー、ヒロインのプロマイドやカレンダーとならんで、同じ規格でシヴァ

やクリシュナなどの神々の似顔絵が売られている。商店、レストランはもちろん、どの家庭にお邪魔しても一枚はこうしたカレンダーやポスターに出くわす。人々は、ラーマヤナの物語を通じてラーマとシータの夫婦愛、ラーマとラクスマンの兄弟の絆に感情移入し、それを理想として追求する。また、幼児期のクリシュナに対する乳母ヤシヨダーの溢れ出す愛情は、インドの人々に、ヤシヨダーがクリシュナを愛するように自らの子供を愛せよという強力なメッセージを刷り込んできた。こうして、神々の物語を愛し献身的に帰依することによって、現世での徳を積み解脱へ近づけるといふ希望が生まれ、ヒンドゥー教は巨大な大衆的基盤をもつ民衆宗教として確立していった。帰依の念を表明する方法も、高度なヨーガや瞑想ではなく、自分の敬愛する神々の誕生日など特定の日に断食をしたり肉食を断つといった、凡人でも実現可能な行為でよしとされた。このようにして、非常に大雑把な整理ではあるが、聖職者(バラモン)や修行者(サードウ)が聖典への深い理解や高度な肉体鍛錬によるジュナーナ・ヨーガ(知識のヨーガ)やカルマ・ヨーガ(行為のヨーガ)の道を経て解脱を目指すのに対し、民衆は愛する神への徹底した帰依によるバクティ・ヨーガ(信愛のヨーガ)によって同じ頂点を目指すことになる。そして、程度の違いこそあれそのどちらにも要請されるのが、現世におけるストイシズム、とりわけ「食べない」といふ自己犠牲を通じた肉体と精神の純化(purification)である。

カーストと菜食 食による社会編成

ここまででは、ヒンドゥー教と食のあり方の関係を主にその教義の側面から見てきたが、ここでは社会システムの成り立ちとの関係から考えてみよう。ヒンドゥー教という宗教を知るためにはカースト制度を理解しなければならないとは、よく言われることである。カースト制度とは、非常にシンプルな定義としてはバラモン（聖職者）、クシャトリア（王族）、ヴァイシャ（商人）、シュードラ（農民）という四つの身分（ヴァルナ）から編成されるピラミッド構造の社会システムを指す。他方、村落共同体における具体的な人間関係としてのカーストは、むしろジャーティと呼ばれる職能集団によって分類されており、その分業体制による経済社会システムこそがカーストシステムということになる。もちろん、これら数多くのジャーティもまた先の四つの身分のいずれかに該当するため、個々人のカーストについての自己了解はヴァルナとジャーティの二つのコンビネーションからなり、日常の経済社会活動においては具体的な職業を指すジャーティのほうが強いアイデンティティとなる。

このカースト制度であるが、異なるカースト間では婚姻関係を結んではならないこと、そしてともに食事をしてはならないという、二つの禁忌事項によって基礎づけられている。ヒンドゥー教の社会システムでは、バラモン、クシャトリア、ヴァ

イシャ、シュードラが、この順に浄・不浄の垂直ヒエラルキー上に配置され、下位カーストになるほど不浄とされる。そして、先に述べたとおり、菜食や断食といった身体と精神を浄化する行為の継続こそが上位カーストの浄性を維持する条件となっている。より身分の低い者はより不浄性が高いことになり、それゆえに自分より低いカーストの者が作った食事を食べることはタブーとされる。よって、伝統的には料理人という職業はバラモンに担われていたし、現在でも地方においてはこのシステムが維持されている。

さて、ここで菜食の継続がバラモンをして世襲的にヒエラルキーの最高位に位置づけてきたと書いたが、一見非常に固定的とのイメージを与えるカースト制度の可塑性が、菜食という生活習慣そのもののなかに潜んでいたと、歴史は証明している。すなわち、非常に時間のかかる作業であり、おそらくは何世代をも要して展開された運動であるうと思われるが、低位カーストグループが自分たちより高位のカーストグループの生活習慣を模倣することによって、より高位の身分を勝ち取る現象が見られるようになった。インド人学者のシュリニヴァースは、この現象をバラモンの伝える聖典言語にちなんでサンスクリタイゼーションと呼び、現在ではこの呼称が定着している。特に、植民地支配下で伝統的なヒンドゥー社会が動揺した十九世紀以降にサンスクリタイゼーションは活発化し、菜食主義に加えて寡婦の再婚禁止や禁酒など浄性が高いとされる習慣がより広範

な社会集団間に共有されるようになった。こうして、民衆の宗教エートスとしてはバクティ（信愛）運動が、社会運動としてはサンスクリタイゼーションが、車の両輪となって菜食主義文化を大衆化させていった。そして、二十世紀、マハトマ(Mahatma、偉大な魂)・ガンディーがインドの大英帝国からの独立運動の指導者として台頭し、社会の基層にまで浸透していた菜食文化、不殺生の思想の政治動員、国民文化化を推進していったのだ。

ガンディーと菜食主義

Mohandas Karamchand Gandhi は、一八六九年十月二日、現在のグジャラート州の港町ポルバンダルに生まれた。ガンディーの自伝によると、母親のパトリバリーは非常に信心深いヒンドゥー教徒であり、グジャラートの四カ月にもわたる長い雨季の間中、一日一食の断食を欠かさなかったという。ガンディーの英国留学に最も激しく反対したのもパトリバリーで、彼女がガンディーにしつけた禁欲の戒律を破ってしまいはしないかと非常に心配したようである。そうした厳格なヒンドゥー教徒の家庭で育ったガンディーは、英国留学中も母の期待にそむくことなく、数少ないヴェジタリアンの食堂を探し歩いたり、ヴェジタリアンの協会で活動したりした。ガンディーは、この協会

が発行していた機関誌 *The Vegetarian* に一八九一年二月から三月の期間に六回に分けて“Indian Vegetarians”というエッセイを寄稿し、インドの菜食主義者の食習慣を紹介し、さらにはインドの菜食主義者が体力的に虚弱であるとの風説に対して羊飼いの屈強さを例に出して反証を試みている。その生い立ちにおいてガンディーはそもそも菜食主義者であったが、ロンドンでの滞在において親切な友人からの肉食の勧めに対して誓いを守りとおす強い意志を発揮したこと、そして英国のヴェジタリアン協会との出会いを通じて西洋合理主義に基づく菜食主義思想を学んだこと等によって、彼の菜食主義はその意志においても思想においても強化されたと言える。自伝のなかでガンディーはこう書き記している。

わたしはその中の一冊、ソールト著『菜食主義の訴え』を眺めた。わたしは一シリング払ってこの本を買った。(中略)わたしはソールトの本を端から端まで読んだ。そして強い印象を受けた。この本を手にした日から、私は進んで菜食主義者になった、ということを主張したい。母の面前で誓いを立てた日を私は祝福した。(中略)今や私は菜食主義者を選択することにした。そして、それを広めることがわたしの使命になった。

ガンディーは自由意志で菜食主義者となることを選びとった。

そこから、ヒンドウの宗教的エートスを超えた社会思想としてのアヒンサー（不殺生）、非暴力革命の思想が生み出されていったのである。それは、生けとし生きる万物を傷つけるという考えに対する完全なる制御であり、その状態に向けたたゆまぬ自己浄化のプロセスである。南アフリカにおけるインド人労働者の権利獲得のための闘争＝Satyagraha(Satyaは真理、Agrahaは把持の意)を経てインドに帰国したガンディーは、アシュラムにおける農業実践と菜食生活、手紡ぎの綿で作った着物「カーディ」の推奨に取り組んでいくなかで、菜食と自給自足（スワデシ）を基礎とした農村共同体をインド国民統合のモデルとして打ち出していく。このとき、自ら率先して手紡ぎ車を回し、英国製の着物を燃え盛る日のなかに投げ込むなど、ガンディーが自身の身体そのものを政治的シンボルとして最大限に行使したことは、リチャード・アッテンボロー監督の映画GANDHIなどを通じてよく知られているところであろう。そして、この肉体の政治的シンボル機能の發揮としてガンディーが最も戦略的に、かつ命を賭して臨んだものが、究極的な動物的本能の制御、すなわち断食であった。

ガンディーと断食

ガンディーは、真理把持運動＝Satyagrahaのかなり初期の段

階から、運動の求心力が弱まり活動家の間の不安や動揺が大きくなった時に、断食を実行している。一九二八年一月二十二日に書いた『懺悔としての断食(Fasting as Penance)』によると、一九一四年、南アフリカのアシュラムにおいて、生徒の非行と怠慢が目に残るようになった際にガンディーは七日間の断食を行って、生徒たちを改悔させたとある。不可触民差別の廃止を訴えた一九三三年五月の三週間にわたる断食、あるいは独立後の混乱のなかでヒンドウとムスリムとの融和のために一九四七年九月に四日間、一九四八年一月に六日間行った断食などは、対英独立運動において正義（非暴力）は常にインド側にあることを内外に示すための、まさに「決死」の断食であったと言える。しかし、こうした独立運動の歴史的重要な局面におけるガンディーの断食はよく知られているが、それだけではなく、歴史をふりかえってみると先に紹介した南アフリカでの生徒の非行のように、非常に些細ともとれる出来事に対しても彼は断食をもってこれを改めさせようとしていることがわかる。例えば、一九四〇年六月二日にアシュラム内でペンと手紙が盗まれたとき、ガンディーは盗んだ人が訴え出るまで断食を続けると言っときかなかったという。最終的にはアシュラムの仲間の説得を受けて断食には訴えなかったが、彼の徹底した頑固ぶりを伝える話ではないか。

こうして、ガンディーは真理把持闘争におけるさまざまに困難な局面において、挑発的な扇動行為や強圧的な押さえ込みと

いった手段ではなく、むしろ自らの生命を背景にした沈黙によって事態の沈静化と舵取りをはかったのだ。実際、一九四二年八月、指導者の逮捕に対する抗議運動中の警官の発砲を機に発生した暴動に対しては、ガンディーは九十一時間、物理的に沈黙を貫くという抗議表明を行っている。

このようなガンディーの「食べない」という負の身体的パフォーマンスによる大衆動員は、ポピュリズムという誇りを受けるかもしれない。インドの市民社会の成立に懐疑的な Partha Chatterjee は、「ガンディーと市民社会批判」のなかで「農民は動員されるとしても参加はしていない」という国民国家の政治的枠組の概念、つまり農民は国民の一部であるにもかかわらず、永遠にその国民国家からは疎外されているという国民の概念が、ガンディー主義全体の統一的なイデオロギーの中に見出せるのである。」とガンディー主義の限界性を指摘している (Chatterjee, Partha, "Gandhi and the Critique of Civil Society", in Guha, Ranajit, ed., *Subaltern Studies III* (Delhi: Oxford University Press, 1984) 竹中千春訳)。すなわち、一九一九年、英国政府の戦時下治安法の継続としてのローラット法制定に対する国民的大抗議運動としての第一次サツティヤグラハが民衆の暴徒化によって失敗に終わったとき、ガンディーはこれを「ヒマラヤの誤算」と認識し、以降、直接的国民参加ではなく少数のリーダーシップの育成と彼等を通じた国民動員へと方針転換をしたのだ。しかし、こうした断食や沈黙という手段による大衆運動の舵

取りを可能にするには、その手段が民衆レベルにおいてまで有効でなければならぬことは言うまでもない。断食がインド以外の地においていかほど政治闘争手段として有効かと問われれば、誰もがこれを疑問視することであろう。先に紹介したように、バクティ運動やサンスクリタイゼーションによって大衆に深く根付いた「解脱のための禁欲的帰依」という思想が、明らかにガンディーの非暴力・不服従運動の基礎的条件として不可欠であった。例えば、キラーフアト運動におけるヒンドゥーとムスリムの連帯行動は、この地における宗教を超えた連帯と融和の可能性を指し示すものであった。第一次世界大戦後、英国政府がトルコ王朝に対してカリフ制の廃止を宣告した際、ガンディーは、これに強く反対するインドのイスラム教徒のためにヒンドゥー教徒もともに闘うように働きかけた。すなわち、イスラム教徒が二十四時間の断食を行う十月十七日(イスラムではこの日を *Roza* と呼ぶ)を完全ストライキの日と決定し、ヒンドゥー教徒もまた同胞のために店や工場を閉め、祈りと断食を行うように訴えた。十月十二日、*Nayin* 誌にガンディーはこう書いている。

このような時におけるヒンドゥー教徒の義務は明白である。もし彼等がイスラム教徒を同胞とみなすならば、彼等はイスラム教徒の苦難を完全に共有すべきである。これが、ヒンドゥーとイスラムの間の団結を促進させる最善かつ最も簡単

な方法である。他者の悲しみを共有することのみが、兄弟愛の唯一かつ真実の証である。それゆえ、インドのあらゆる男女が十月十七日をお祈りと断食の日として過ごすことを私は願う。(バガヴァッド)ギターはヒンドゥー教徒の間であまねく聖典として受け入れられている。ヒンドゥー教徒はギターを最初から最後まで、その意味をかみしめながら読んでほしい。

Chatterjee は、結局インドは一握りのエリートによって統治されるしかない、自己の政治的価値の表明に対する明確な権利意識を背景にした市民社会の成立にとつてのインドの限界性を嘆く。しかし、独立運動の過程においてヒンドゥーとイスラムの融和による反英抗議運動の全国展開を可能にしたのは、決して少数支配者による先導だけではなく、インドの人々の精神と生活実践のなかに長い時間をかけて培われたアヒンサー思想によるところも大きいと言わねばならない。

そして、ガンディーはこの民衆のアヒンサー思想の強さを誰よりも深く理解していた類い稀なる政治家であった。「後生の人々はこの地上にこのような人間が存在したということを奇跡と思うであろう。」とのアルバート・アインシュタインの言葉に象徴されるように、ガンディーのカリスマ性が門外不出のものであることは論を待たない。しかし、ガンディーはインドが生んだ奇跡であり、特に人間の動物的本能としての食を敢えて

抑制する菜食や断食が、単に哲学的・宗教的思惟のレベルではなく、バクティという生活実践として庶民の伝統となっているところから生まれ得た存在である。ガンディーがそうした土壤なくして生まれ得なかつたとすれば、インドが大衆的な力としてもっている非暴力の思想は、決して軽視すべきではない。一九四七年八月十五日、インド共和国がイスラム教徒からなるパキスタンという国を両脇に産み落としながら独立を宣言した。

独立インド領のイスラム教徒はパキスタンへ、パキスタンのヒンドゥー教徒やシク教徒はインドへと移動を余儀なくされ、国境をまたいで大規模な殺りくと暴力が繰り広げられた。東の境界に位置するカルカッタは内戦状態になっていた。この非常に危険な治安状況のなかガンディーはカルカッタへ赴き、九月一日、憎しみの連鎖のなかで殺しあうヒンドゥーとイスラムに争いの停止を求め、死を賭した断食を決行した。九月四日、ヒンドゥーとムスリム両者の代表が彼のもとを訪れ、ガンディーに対し争いを止めることを伝えるシーンもまた、映画 GANDHI のなかで非常に印象的に描かれている。一九四八年一月にガンディーが断食した際には、百を超える宗教団体の指導者が彼のもとを訪れ、争いの即時停止などガンディーが提示した七つの条件に署名したという。こうした史実を通して、インドの地において人々の生活レベルまで深く根付いているアヒンサー思想が、一般に言われる市民社会とはまた別の形態の、人々の連帯の可能性を開くものであると信じたい。

現代インドにおけるアヒンサーの可能性

いまやインドには強力な外国支配者としてのイギリスはいなくなつた。また、そのイギリスからの独立運動において最も大きな指導的役割を果たした政治指導者の一人であるガンデーは、一九四八年、ヒンドゥー至上主義者ナトラム・ゴドセに暗殺された。イスラム教徒に対してあまりに融和的であつたためにパキスタンを生んでしまったというのが、ヒンドゥー至上主義者のガンデー評価だつた。そして、生まれたばかりのインド共和国は初代首相ジャワハルラル・ネルーの指導のもと、ガンデーが描いた農村共同体型の反近代的国家イメージとは正反対の、工業立国を目指した社会主義型国家建設に取り組んだ。国民会議派は、独立後も国内の多様な利害を調整する国民政庁として長く政権党の地位にあり、ネルーの後モインディラ・ガンデー、ラジブ・ガンデーという血族が国政をリードした。しかし、国際情勢の急速な変化に伴い、国政においても経済システムの見直しや複雑多様化する利害調整などの新たな課題が噴出するなか、巨大化した国民会議派は内部から腐敗しはじめ影響力を低下させた。現在はヒンドゥー・ナシヨナリズムをかけるインド人民党が政権を執っている。近代産業は、当初の目標どおりではないにせよ、自家用車から核兵器まで国産する

レベルに達し、都市の近代化とともにそこで暮らす人々のライフスタイルも変容していった。冷戦の崩壊と時を同じくして、インド政府はこれまでの社会主義型経済システムを放棄し、本格的な市場開放政策を採用して現在に至っている。一九九〇年代の経済成長には目覚ましいものがあり、特にIT産業における国際的躍進は、内外に「貧しく神秘的な」インドのイメージの修正をせまつた。大都市を中心に外国企業が参入し、インドとの貿易や投資を拡大した。それに伴つて、海外、特に西洋世界からの文物、情報が大量に入り込み、欧米文化が生活における影響力を強めている。また、収入の飛躍的増大によつて購買力をつけた中間層が台頭し、その数は二億とも三億とも言われるまでになつている。

さて、こうした国民経済の大きな変化に伴つて、文化、特に人々の食文化はどのように変わつてきているだろうか。冒頭にも触れたが、これだけ急激に欧米文化が流入してもなお、インドという国にはこうした要素を自文化に吸収したり抵抗したりする強い力が作用しているように思われる。ハリウッドの積極攻勢にもかかわらず、世界のなかで未だインドだけはアメリカ映画の流入を最小限に抑え込んでいる稀有な国である。マクドナルドも大都市に店舗を増やしつつあるが、決してメニューにビーフやポークが登場することはない。私のインド滞在中に、フライドポテトにビーフパウダーを使っているという疑惑がもちあがり、一時マクドナルドの経営が危つくなつたことがある。

牛と豚以外の肉食に関しては、イスラム教徒や低カーストグループの人々の間ではむしろ日常的に行われているとも言えるが、高位カーストグループから増大するミドルクラスにかけて、肉食文化の広がりに対して嫌悪感をもっている人々も多く、インド人の生活習慣において、積極的・自発的に肉食を励行している人々もかなりの規模になるものと思われる。台頭するヒンドゥー・ナシヨナリズムは、異なる宗教間の共存・融和にとつて脅威となる現象ではあるが、彼らがマクドナルドやクリスマス、バレンタインデーといった西欧起源の新しい都市消費文化と結びついた異文化に対して示すアレルギー反応は、かなりの程度、ガンディーが唱えた自国産製品愛用（スワデシ）の流れを汲む運動でもある。民族義勇団らのヒンドゥー・ナシヨナリズム団体による貧者のための学校や病院の運営は、市場経済の浸透に伴う共同体的価値の縮小や貧富の格差増大といった社会的公正に対する世直し運動としての性格ももっている。異文化の侵入に対する危機意識が過剰に政治化し、十世紀以上にわたって共存してきたヒンドゥー教徒とイスラム教徒との融和にかげりが見えていることは残念なことだが、この運動の公共的価値創造機能もまた軽視してはならない。

他方、政治の表舞台では宗教に基づいた民族主義の過激な主張が繰り広げられていても、諸地方の社会運動においては、異なる宗教やカーストグループ間の連帯を促しながら生活条件の改善につとめる日常的な努力もまた展開されている。私がイン

ド滞在中にしばしば訪問していたウツタル・プラデーシュ州サハランプル市郊外の農村地帯におけるNGO、ディシャーの人々は、宗派を超えて村の女性たちがボランティアスタッフとして活動しており、そつやつてコミュニティ横断的な組織作りをすることにより、社会的な安全保障も維持している。実際、九〇年代初頭にインド全土にふきあれたヒンドゥー・ムスリム間の紛争において、サハランプル一帯には民族間の争いがほとんど発生しなかった。彼らのもとを尋ねるときはいつも、おいしい昼食をいただくのだが、料理には一切、肉が使われていない。集会室には、ガンディーやアンベードカル（インド独立運動期の不可触民のリーダー）の肖像が飾られている。ディシャーに限らず、私が訪問の機会を得たNGOの多くが、ガンディーの非暴力・不服従を思想的基礎とし、自然との共生、アヒンサーを日常生活において実践している。国際政治情勢が不安定化し、インドにおける異なる利益集団の対立が激化してもなお、この国のアヒンサーがもつ自浄能力は社会の安定を底辺から下支えする大きな力をもっていると筆者は考える。そして、我々がガンディーという偉大な魂（Maha-atma）の思想だけでなく、それを育てたインドの土壤に人々（Atma）の具体的な暮らしとともに生きるアヒンサーの思想から学ぶことは、決して小さくないと思う。世界が宗教間の対立という単純な図式で解説され理解される最近のトレンドに対抗して、実践的平和創造のモデルとしてのインドの生活の現場におけるヒン

ドゥーとイスラームとの共生の事例に注目していきたい。